平成残侠伝「日の丸と菊の御紋」

一、播磨屋助次郎の男の美学

『侠客と言われて無性にうれしかった変な私』

三年ほど前の「播磨屋通信」のタイトルです。

「播磨屋本店の社長は侠客やなあ。大好きや」私どもの姫路店に来られたある男性客が、買い物をしながらしみじみとこう言われた。この報告を受けた私は、他のどんなほめ言葉よりも格段にうれしかった――ざっとこんな内容でした。

「侠客」余り一般的ではない言葉ですが、辞書を引くとこう記されています。「江戸時代に、強者をくじき弱者を助けることを看板にした男」

私播磨屋助次郎の男の美学はただ一言「侠客的生き方を貫きたい」これです。時代錯誤と笑われるかも知れませんが、私播磨屋助次郎は、そんな本当に時代遅れのバカな男なのです。

二、昭和残侠伝「唐獅子牡丹」

今回の憂国巻頭言、妙なタイトルだなあ。どういう意味だろう――多くのお客様がそう思われたと思います。無理もありません。もう四～五十年も昔の東映映画『昭和残侠伝「唐獅子牡丹」』をもじって付けたタイトルだからです。

昭和残侠伝シリーズは、俳優高倉健を一躍スターダムにおし上げた、いわゆるヤクザ映画の金字塔的作品です。

高倉健扮する、背中に唐獅子牡丹の彫り物を背負った残侠（残存侠客の意）花田秀次郎が、筋を通しては生きにくい人の世を、真実命がけで筋を通して生きる――そんなストーリーの映画です。

当時、高校生から大学生だった私は、このシリーズの熱狂的ファンになってしまい、足繁く映画館通いをしたものでした。

その頃「残侠」に対して抱いた熱い思いは、還暦を越えた今も当時のままで全く変わりません。

自分勝手な思い込みかも知れませんが、昭和の残侠花田秀次郎が平成の残侠播磨屋助次郎を生み出し、今日まで育て上げてきてくれた――私にはそう思えて仕方がないのです。

三、高校時代の不思議なエピソード

東京オリンピックが私の高一の秋でした。またビートルズの初来日が高三の夏でした。丁度その頃から日本は、高度経済成長を開始したのです。いえ、アメリカを理想の国と振り仰いで、猛烈なアメリカ追従（西洋かぶれ）が始まったのです。

ところが当時の私は、そんな世の中全体の大きな変化が、理由はよく分からないままに、不安で不安で仕方がありませんでした。

一体どこまでどう変わって行くんだろう。私は上手く付いて行けるだろうか――等々といろんな思いにさいなまされてです。

そんな人一倍多感だったわが高校時代の不思議なエピソードとは、誠に恐れ多いことながら、現皇太子殿下にまつわるものなのです。

殿下は、私と丁度一回り違いの、昭和三十五年のお生まれです。私が高校生の頃、殿下は四つか五つのかわいい盛りのご年令でした。ナルちゃんという愛称で、盛んにマスコミに取り上げられておられました。

私は、そんな「ナルちゃん」の大ファン（信奉者）になってしまったのです。近寄り難いほどの気品と聡明さを兼備された「ナルちゃん」に、生来の愛国少年だった私は、日本再生の大いなる可能性を感じ取ったのです。

将来きっと偉大な天皇になられて、日本の本来あるべき姿と誇りを取り戻してくださるに違いない――若い純粋な感性がそう予感したのです。

わが遠い遠い少年の日のこの予感は、今や実現寸前です。本当に不思議なことではあります。

四、バカな男と笑わば笑え

健さん扮する花田秀次郎は、その背中に唐獅子牡丹の彫り物を背負っていますが、私播磨屋助次郎は、心の背中に、日の丸と菊の御紋の彫り物を背負っているのです。

また花田秀次郎は、長ドス一本引っ提げて、ただ独り殴り込みをかけに行きますが、私播磨屋助次郎は「真実」一つ引っ提げて、ただ独り「人類救済と地球再生」に挑戦し続けているのです。

そしてまた花田秀次郎は、親からもらった肉体的生命を投げ出して戦いますが、私播磨屋助次郎は、全国無数のお客様方に大きく強く育てて頂いた「播磨屋本店」の企業生命全てを惜しげもなく投げ出して戦い続けているのです。

強者だと勘違いして、破壊の限りを尽くしている愚かな人類を戒め、物言わぬ弱い立場の自然を助け、窮地に立つ地球を救わんがためにです。

最後に、かの坂本龍馬の作と言われる歌を一首紹介して結びとします。

世の人は　われを何とも言はば言へ
わが為すことは　われのみぞ知る

平成二十五年　早春　播磨屋助次郎　謹言

※播磨屋助次郎のプロフィールは裏表紙にあります。